

2012 年度秋学期授業アンケートのまとめ

2013 年 5 月 10 日

F D 委員会

2012 年度秋学期の授業アンケートは、2013 年 1 月 8 日～1 月 28 日の間に実施されました。その後アンケート結果に対して、各教員からコメントを提出していただきました。以下、これについてまとめと分析を行います。

(1) 数量的把握

1 アンケート回答率

今回のアンケートの実施状況は以下のとおりです。

表 1 アンケート回答率

区分	受講者数	回答者数	回答率(前年秋比+)
全体	17,571	9,896	56.3%(1.0)
座学科目	12,967	6,132	47.3%(1.1)
英語科目	2,202	1,815	82.4%(▼0.6)
中国語科目	377	304	80.6%(2.6)
朝鮮語科目	219	199	90.9%(5.0)
日本語科目	118	110	93.2%(0.6)
フランス語科目	16	13	81.3%(1.3)
ドイツ語科目	29	22	75.9%(▼0.1)
コンピュータ実習科目	202	141	69.8%(2.2)
スポーツ実践科目	467	424	90.8%(6.0)
教養演習科目	95	81	85.3%(▼3.5)
専門演習科目	879	655	74.5%(2.3)

全体の回答率は、年々上がっています。2010 年度秋が 53.9%、2011 年度秋が 55.3%でしたが、昨年度秋は 56.3%となり、1 パーセント向上しました。科目群別にみると、これまで同様、演習、語学、実習は高い率となっていますが、座学では依然として、回答率が 50%を割っています。最低でも 50%を越すような努力が求められます。

2 各項目の点数

各アンケート項目の点数は表2のとおりです。

表2 授業アンケート全体スコア

2012年度後期 授業アンケート(全体)

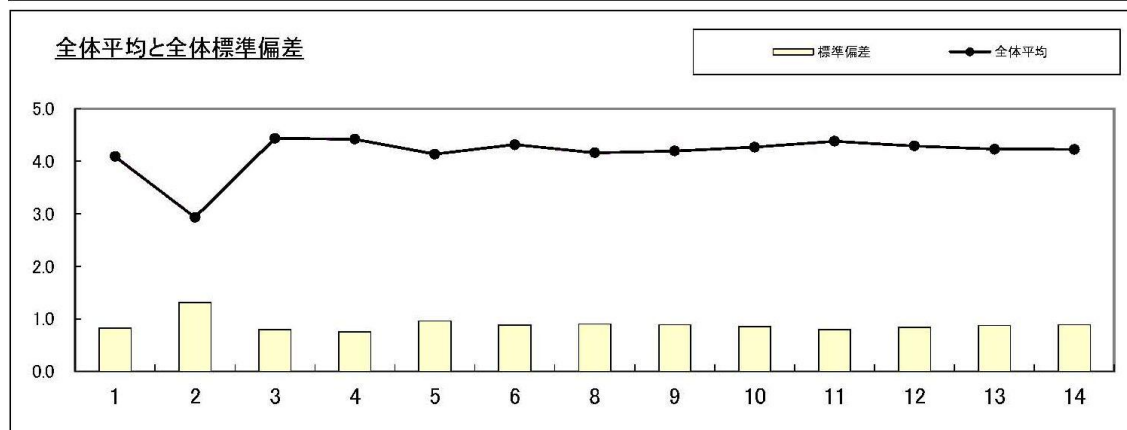
下関市立大学

受講者数	17571
回答者数	9896

学年				
1年	2年	3年	4年	無効回答
4031	2802	1898	1009	156

学科			
経済学科	国際商学科	公共マネジメント学科	無効回答
4378	4371	922	225

あなた自身について										
番号	設問文	当科目の標準偏差	当科目の平均点	各マークの回答数					有効回答	無効回答
				5 5 そう思う	4 4 やや そう思う	3 3 どちらとも いえない	2 2 めぼやく う 思わない	1 1 そう 思わない		
1	この授業にはどれくらい出席しましたか。	0.83	4.09	100% 3392	90~99% 4367	70~89% 1815	50~69% 236	49%以下 77	9887	9
2	この授業に十分に予習あるいは復習をしながら臨みましたか。	1.31	2.93	必ず 1308	ほとんど 2237	半分くらい 2837	少しだけ 1437	していない 2052	9871	25
授業運営について										
3	この授業の開始時間は守られていましたか。	0.80	4.44	5796	2978	802	229	78	9883	13
4	この授業は、基本的にシラバス(評価方法を含む)にそって運営されてきましたか。	0.75	4.42	5474	3244	1028	97	44	9887	9
5	板書やビジュアル資料などがわかりやすかったですか。	0.96	4.13	4358	3290	1623	439	175	9885	11
6	声の大きさ、明瞭さ、速さなどの点で、教員の話し方は聞き取りやすいものでしたか。	0.88	4.32	5240	2990	1163	328	104	9825	71
7	授業内容の難易度について、どのように感じましたか。	X	X	難しすぎた 863	少し難しかった 3315	適切であった 5488	少し簡単すぎた 158	簡単すぎた 64	9888	8
8	学生の反応や受けとめ方などに配慮しながら授業は進められていましたか。	0.91	4.16	4319	3398	1714	358	100	9889	7
9	教科書等を含め授業中に用いられた教材や資料は役に立ちましたか。	0.89	4.19	4457	3397	1649	266	118	9887	9
10	教員は、私語を注意するなど、静かな授業環境を保つための努力をされていましたか。	0.86	4.27	4833	3250	1497	229	79	9888	8
11	授業に対する教員の熱意は感じられましたか。	0.80	4.38	5399	3108	1183	136	63	9889	7
12	担当教員は質問しやすい雰囲気をつくるとともに、質問や相談は丁寧に対応していましたか。	0.84	4.29	4962	3131	1512	199	65	9869	27
総合評価について										
13	授業を履修して、この授業科目への関心を深めることができましたか。	0.87	4.23	4500	3430	1444	227	122	9723	173
14	総合的に見てこの授業に満足できましたか。	0.89	4.23	4548	3328	1462	251	131	9720	176



過去2年間の秋学期のスコアと比較すると、どの項目も着実に上昇がみられ、先生方の授

業改善の取り組みが成果となって結実していることがよくわかります。

項目別にみていくと、1, 2 は学生自身の努力についての項目ですが、2011 年度比で出席率は昨年比 0.02、予習・復習の頻度は 0.13 上昇しています。教員の尽力の結果、学生自身が自分たちで学ばなければならないという意識を少しずつもってきていることがわかります。

なお、この第2項目については、学生の自主学習の実態をうまく反映していないので、質問の仕方の変更が必要であるという多くの意見がありましたので、次節で紹介します。

授業運営の項目(3~12)のいずれの項目も着実に上昇し、すべてが 4.1 以上です。特に、昨年度までは板書・ビジュアル資料の見やすさは、3 点台でしたが、今回は 4.13 にまで達しています。また、声の大きさや速さについても、高いスコアとなっています。下記のアンケートコメントでも、これらの基本項目についての改善必要性への言及が少ないことをみても、板書、資料、話し方については、相当に改善していると言えます。

また、シラバス通りの運営についても高い点がついており、計画的な授業運営の意識が高まっていることがわかります。

さらに、総括的な指標である、科目への関心(13)、授業満足度(14)は、昨年よりもさらに 0.1 上昇しており、大きな改善がみられていることがわかります。

こうしたスコアの上昇がどこまで実態を反映しているかについては、さまざまな議論もあるでしょうが、教員の努力により、学生自身の学ぶ姿勢にもよい影響がでてきて、着実に授業改善が進んでいることがわかります。教員の努力が数字の向上に表れています。

また、授業アンケート→コメント→まとめ→翌学期の新しい取り組み→成果というサイクルが確立し、そのなかからそれぞれの教員が主体的に問題を受け止め、改善の努力をされていることもうかがい知れます。個々の教員の教育改善努力と、FD の制度がさらにうまくリンクするような方法を今後とも、模索していく必要があります。

(2) 教員コメントのまとめ

授業アンケートに対する教員のコメントをまとめてみると、以下のようなことがわかります。

これまでは、以下の 6 項目が重要であることを強調してきました。

- 1 学生の多様化、学力格差への対策が急務となっています
- 2 初年次教育の整備が早急に求められています
- 3 授業態度の悪化に対する記述が増えています
- 4 自ら学ぶ姿勢をどう育てるかが重要な課題です
- 5 TA 制度などの授業アシスト制度の導入が求められています。
- 6 授業改善のために、受講人数の更なる制限が求められています。

今回のコメントでは、このなかで、1、3、4 についての記述が多くなっています。特に、4 については、それぞれの教員の努力の成果を反映したコメントが多くありました。また、6 については、受講人数の制限が導入されたこともあってか、今回はこの点について触れたコメントは多くありませんでした。

以下、これらの項目に限らず、コメントの中で重要と思われる点をまとめてみます。

1 学生の多様化、学力格差について

1) 学力低下への危機感

今回、コメントの中で多かったのは、これまでと同様、学生の学力低下についての危機感でした。そのトーンは厳しいものとなっています。

毎回、努力してわかりやすく講義しようとしているつもりだが、学生には伝わらず、「こんなレベルの低い学生がいたのかとあきれれるほど。大学のレベルもこんなに落ちたのかと呆れます」という悲鳴に近いものがありました。また、学力格差が大きい場合、どこに焦点を当てて授業してよいか戸惑うという悩みも掲げられていました。

ただ、同じように学力低下を嘆きつつも、何とか対応するしかないという次のような意見もありました。「今日の学生の学力低下は目を覆うばかりである。しかし議論の理解度を上げるために、面倒でも基礎知識（中学レベルの世界史・日本史・政治経済など）から教える努力が必要である」。

教育に王道はないので、学生をよく見て、必要な対応を重ねるしかありません。その点で、今回は参考になる対応事例がいくつか示されていたので、紹介します。

2) 学生の反応を見た対応の必要性和事例

①教科書・教材の変更あるいは使い方の修正：今回のコメントの中では、学生がついてこれられない中に、テキストが難しすぎたというものが少なからずあげられていました。これについては、ある教員は、当初シラバス通りの教材で授業を進めていたが、学生の理解度が低いので、学生と相談して、シラバスを修正し、よりわかりやすい教材を使って授業したら効果があったという事例が紹介されていました。

②授業プランの変更：また、学生の理解度が低いので、シラバスを修正し、授業速度を遅くしたら効果があったというケースも紹介されていました。

いずれの場合も、学生に十分説明・相談してシラバスを修正することに同意を取ったうえで、授業計画の修正がなされています。

③授業速度の遅さへの不満：他方、逆の事例では、毎回のリスポンス・ペーパーを十分活用し、毎回わかりやすいようにと補足説明をしていたら、それに相当の時間をとってしまい、計画通り先に進めてほしいという声があったことも紹介されています。

④他大学の事例の参照・紹介の課題：いずれも学生をよく見てこまめに対処している事例です。こうした学内の取り組みの交流はもちろんですが、同じような課題を抱えながら奮闘している他大学の事例をも参考にすべきかと思われます。これについては、学内研修、学外研修の機会を設けておりますので、これにできるだけ多くの教員に参加していただく、あるいはその成果をみなさんに還元していく努力が必要です。特に後者について、今期のFD委員会が努力不足であったことは率直に反省しなければなりません。研修に行かれた教員の成果を、報告会、ニュースなどでもっと多くの方に共有していただく努力をすべきでした。今後の課題として、残ります。

3) 多様な学生を一つのクラスで教えることの難しさ

①**多様性の拡大**：この点については、クラス規模の大小、講義、語学、演習、実習という科目の性格を越えて共通に指摘されていたことでした。熱心に質問し、「学ぼうとする意識の高い学生が多い」反面、基礎力が大きく不足しており、どう対応していいかわからない学生がいるということの難しさ、どこにターゲットを絞って授業をつくれればよいかかわからない難しさが指摘されていました。これは、能力の差だけではなく、学部留学生と短期留学生を同じクラスで教えなければならない難しさのように、学生の性格のちがいについても指摘されていました。

②**習熟度別クラスの効果**：英語では、習熟度別でクラス編成していますが、これについては、もちろんクラス規模がまだ大きくて、習熟度を分ける精度に問題がなしとはいえずとも、コメントの中では、プレイスメント・テストを行って、ずいぶん授業しやすくなったし、学習効果があがったという声もだされていました。

③**教育効果の事例**：もちろん、とても熱心に学ぶ学生が多くよかったという評価、あるいは次のような前向きな評価も存在しています。感動的なコメントです。

どんなに拙くても自分で考える訓練、表現する訓練をすること、それを徹底してきたつもりである。

最後の答えはB 4一枚に数人の学生以外、びっしり溢れるくらいの論述がなされていた。ネットしか見ない、携帯づけ、自分で文、文字を書かない、自分で考えない、考える力がない・・・今の若者に一般的に言われている評価を大きくくつがえす事実が、今回も答案には顕れていた。感動した。

必ずしも、学力が低下したというだけでは把握できない、多様な学生の実態を教員の側が把握する必要があるようです。

④**下方へのスパイラル**：ただ、気になるのは、多様化によって、授業のレベルが上の方に引っ張られるのではなく、下の方に引っ張られている可能性が高いことです。たとえば、英語のクラスでは、よく予習してくる学生も多いのですが、以前と比べると「必ず毎回」予習してくる学生が大きく減った、あるいは「いなくなった」という声もだされています。

⑤**リメディアル教育の必要**：全体としては、他大学でも導入されているような、リメディアル教育の必要性について、本学でも本格的に検討しなければならない時期になっているのではないかという感を強くします。

2 学生の欠席、遅刻、授業態度の悪化への対応

学生の授業態度の悪化については、毎回指摘されていますが、今回特に目についた点を記しておきます。

1) 欠席の常態化（特に、過年度生）

①**最初から出席しない学生**：学生の出席率については毎回議論されることですが、今回目だったのが、履修登録だけして、最初から欠席する学生が多いという指摘でした。特に、

留年生のなかにそれが多という事実です。過年度生の留年率の高さが問題となっていますが、なによりも学期の最初から授業に出てきていない問題があるようです。また、とにかく授業に来させることを重視し、出席を取るなどの工夫をはじめたところ効果があったという声が複数あがっていました。他方、巨大クラスの授業では、出席を確認するだけで手間がかかるので、出席をとらずに、適時小テストをすることで、出席の意欲を高めた例が報告されていました。

②就職活動による欠席：この取り扱いについて、どのように対処すべきか、「全学的な合意事項」はどうなっているのか、対応方法を示してほしいという非常勤講師からの要望がありました。

2) 遅刻の常態化

実習系の科目で、毎回学生が30分ほど遅刻し、そろわないので、本格的な授業は実質的に30分遅れで開始せざるを得ない状況にあったが、「〇〇分以上遅刻したものは欠席にする」と厳しく対応することで、遅刻者は減少したとのこと。

3) 授業中に飲食する学生

これまでも指摘されていたことですが、やはり授業中に飲食する学生がいるという報告がなされています。従来は想定できないことですが、現実を直視し、細かく注意する必要もあるようです。

4) 座席指定制の導入と効果

教員の側ではなかなか気づかなくとも、学生のなかに私語をする人がいることが指摘されていたので、座席指定を導入したところ、授業の緊張感が増すとともに、静かになった、あるいは出欠の確認に役立った、さらには学生からも勉強しやすいと好評であった、という例が紹介されていました。

3 自主学習の姿勢を育てる取り組み

これまで自主学習の不足を強調してきたことに対して、各先生がかなり意識して改善の取り組みをし、その成果がでていることを記しているのが、今回のコメントの大きな特徴です。

1) 小テスト、課題の活用

もっとも多く紹介されていたのが、小テスト、宿題などの課題を課すことで、授業以外で勉強しなければならない環境を作り出す努力をしたところ、出席率の向上がなされるとともに、理解度の向上という点でもかなりの効果があったことが示されていました。課題・宿題を課すと、かなりまじめに勉強し、提出する学生の姿が記されていました。指示されないと勉強しないという問題点はあるのかもしれませんが、日常の授業運営の努力が実を結び始めていることがわかります。

2) 「必ず」 予習する学生の減少

英語のクラスでは、もちろん他の科目よりは予習、復習を行っているようですが、それでも、意欲的に学ぶ学生の中でも、「必ず」予習してくる学生が「いない」あるいは大きく減少したことが報告されています。

3) 授業中の復習

あるクラスでは、学生の授業外での学習が不足しているので、授業のなかで復習させる時間を設けているという事例が紹介されていました。

4 教員の意図とのミスマッチと対応

1) 学生の意外な評価

今回のコメントで気になったのは、教員の努力が、相応に学生に評価されていないことへの疑問や苛立ちでした。サブゼミ、フィールドワークなど、「相当に力と時間をつぎ込んだ」のに学生の評価が高くない、あるいは「昨年よりよい授業ができた」と思っていたのに、学生の評価は低い、講義の手ごたえはあるのに学生の評価が低い、なぜだろうという声です。どういう要因が、こうした事態をうみだしているかはわかりませんが、学生の意識の変化と教師側の自己評価にどこかミスマッチが生じていることがわかります。「学生」という場合に、どういう学生か、より細かく観察し、教員間でも意見を交換する必要があるようです。

2) コミュニケーションの改善

こうしたミスマッチをなくす上では、教員・学生とのコミュニケーションをより密にするしかないかと思われます。大人数の講義の場合は難しいのですが、やはりミニッツ・ペーパー、リフレクション・ペーパーなどを使って、適時学生の疑問を把握したり、考えていることをわかってあげることが大事なようです。これらの双方向ツールの効果が報告されていました。

3) 個別指導の有効性

講義系科目ではなかなかいつもというわけにはいかないかもしれませんが、やはり基本的には、論文、レポート、課題の添削を通じた個別指導が一番の方法で、そこで教員に細かく見てもらった、話ができたとということが、学生の学習意欲と効果につながっていることが記されていました。小さな大学としてのメリットを最大限にいかした方法を模索すべきでしょう。

5 演習系科目の充実

前回同様、演習での取り組みについて、参考になる例がたくさん報告されていました。教員の力の入れ方がよくわかります。

1) サブゼミ、フィールドワークの充実

サブゼミやフィールドワークを充実させることで、ゼミ活動が活性化しているという事例が多く報告されていました。授業外に学生たちがグループで学ぶ機会を、ゼミ運営のなかにビルドインすることで、活気がでている事例が多く報告されていました。

2) 他大学、他ゼミとの合同ゼミ、ディベート大会による学生の緊張感と意欲の向上

他大学を含む他のゼミとの合同ゼミの努力をされている教員も数多くおられました。他大学との合同ゼミの効果はこれまでのアンケートコメントにもありましたが、それに加えて、学内の他ゼミとのディベート大会の効果についても指摘がありました。

そこでは、他のゼミを意識することで、学生たちの間に緊張感が生まれ、自主的に勉強する雰囲気が出たこと、あるいは合同ゼミを経験することで、自らの学習の不足を経験し、刺激を受けたことが書かれていました。これを実現するためには、学生だけでなく、教員の側でも準備のために相当な時間と労力がかかりますが、それに見合った効果があることで、教員、学生双方にそれだけの満足感があるようです。学びには他者が必要であることがよくわかります。

学内の先進的な事例を学ぶとともに、そうした取り組みの組織化や宣伝も必要です。その点で、FD委員会があまり積極的な役割を果たせなかったことは反省点です。

3) 演習と講義科目の分業と連携について

ゼミ運営で苦勞されている教員もおられます。ひとつは、知識の習得は講義で、問題発見・解決能力の育成はゼミでという本来のゼミの姿を追求し、学生各自に報告を求めても、講義での知識獲得が不十分で、なかなか期待する効果がでない悩みが出されていました。カリキュラム改革を通じながら、演習・実習と講義の有機的連関の制度を構築するとともに、学生にも学びのシステムを理解させる努力が必要なようです。

4) 学生の自主的なゼミ運営

もうひとつ苦勞されているのが、学生が主体となるゼミ運営です。学生に司会をさせたり、いろいろなイベント企画して運営されておられますが、どうしても教員が中心となり、教員と学生（特に報告者）との1対1の対話になる事態が生じるという悩みが書かれていました。学生どうしが議論し合う状況をつくり出すために、どうしたらよいか、新しい方法を模索されているようです。

5) 参加型学習の効果

この点では、やはりグループ学習の導入が効果的であったという点が共通に指摘されました。事前学習をグループで義務付け、事前の話し合いの場を設定することで、事態がよい方向に向かう例が紹介されていました。

また「レポート、発表を通じて力がついた」という学生の声があることが紹介されていました。

5 卒論指導の苦勞

これまで以上にコメントが多かったのが、卒論指導をめぐる苦勞です。

1) 就職活動の影響

就職活動が長引くなかで、どうしてもゼミを欠席する4年生が多くなり、ゼミの雰囲気がよくない、卒論作成への意欲が低下する、あるいは実際に準備が進まないなどの問題が指摘されていました。「ゼミ全体としての活動力が低下する」という表現もありました。

2) 卒論の進捗状況と質の格差拡大

上記の就職活動の影響もあるのですが、卒論の質についても大きな差が生じているようです。ある教員は、学生が指導にうまく対応できなくて、はじめて卒論で単位を出せない状況が生じ、困惑しておられました。それは、必ずしも一部の教員の課題ではない、全体で共有すべき問題であるように思われます。学生の多様化に対応して、卒論に何を求めるか、どのレベルのものを求めるか、卒論を書く意味がどこにあるか、新しい状況を踏まえて、改めて再検討する機会も必要なようです。

3) 発表会の効果

卒論指導として効果的だと共通して指摘されていたのが、卒論発表会でした。これはいろいろな形があるようですが、ゼミを超えた合同発表会、あるいは地方学会の若手部会を使って報告など、やはり他者の前での報告という緊張感が学習意欲を高めるという点がポイントのようです。

6 技術的な改善の提案

今回のコメントの中には、レポート提出において、「ドラッグ&ドロップ」システムを活用できないかという提案がありました。メールとそれへの添付では、受講生の数が多くなると処理に時間がかかり、ミスも多くなるので、このシステムを導入してほしいという提案がありました。

7 授業アンケートの改善について

授業アンケートの活用、あるいは質問項目について、不適切ではないかというご指摘がありました。現在の質問項目は5年間はずつづけるという形で維持していますので、あと2年後をめどに、新しい質問用紙の作成を考えてみてもよいかもしれません。

1) 第2項目「この授業に十分に予習あるいは復習しながら臨みましたか」の変更

①この項目の点数の低さがいつも問題にされるが、質問の仕方に問題があるのではないかというご指摘を受けました。頻繁な小テスト、毎回の課題・宿題、発表の事前準備など、学生は毎時間ごと予習や復習をしなければならないシステムをつくっているのに、この項目のスコアが低いのは、学生が彼らが事前準備していることを、「予習」「復習」として捉えていないからではないか。この点は以前から指摘がありましたが、質問の仕方を、たとえば「この授業に関係して十分に自宅学習をしましたか」などと変更したらどうかという

具体的なご提案をいただきました。

②また、語学、演習などの科目と、講義科目とではこの項目の持つ意味がちがうので、両者を区別すべきであるというご意見もいただきました。

2) 演習用の質問と講義科目用の質問の区別

演習、語学科目、実習、講義、すべてを同じ質問項目で対応するのは難しいので、科目の性格で質問項目を変えるべきだというご意見をいただきました。複数のシートをつくるのは現実的に難しいところがあるでしょうが、項目選択などでうまく処理できるかどうか検討し、できるだけ科目の実情にあった質問に改善していく必要はあるかと思えます。

ただ、当面は（あと2年は）、これまでもお願いしてきたように、他大学でも実施しているように不足する項目については、自主アンケートを作るなど、各自で対処いただくという方法を取らせていただきたいと思います。

3) 教員の過去のデータとの比較の有効性

アンケートでは、科目の平均と自分の授業とを比較するためのデータが示されているが、より大事なのは自分の過去との比較ができるデータではないかというご指摘がありました。いまのところ、制度としてすぐにこれを改善できるかどうかわかりませんが、それぞれの教員で、データを保管していただき、うまく活用していただければ幸いです。

(3) 施設改善についての各部署からのコメント

施設改善についての要望についての各部署からのコメントは、以下のとおりです。

1 教務班

【I-206：スピーカーの音割れについて】

I棟2階の中教室です。外部の方を含め多くの方に利用していただく教室です。今回指摘のありましたスピーカーの音割れについては、メインボリュームを上げすぎることによるものでした。

このため、メインボリュームを触らないような注意喚起を貼付しました。

【演習室のモニター設置について】

現在、偶数番号の演習室には、PC接続可能なモニターを設置しています。利用頻度等を見ながら、必要であれば増設を検討しますが、来年度については、現状のままです。教室配置等で可能な限り対応したいと思います。

【教室の大きさについて】

一昨年、履修登録時に教室定員の8割を目途に履修制限を行っています。指摘のありました授業について、一部の科目では、他の教室への変更が可能なものもありました。

教室変更がなるべく少なくすむようにはしたいと思いますが、半期間の履修ですので、よりゆとりのある教室での受講を検討します。

また、心理Bについては、400名教室に290名の履修登録者でしたので、教室としては問題ないと判断しております。

【机の数について】

A棟の一部教室について、机の数が多すぎるとの指摘がありました。これは、定期試験時の座席数を確保するための配置数でもあります。通常の授業時には、2席をつけて通路を確保するなど、配置を変更することも検討します。

【黒板について】

大教室で一部黒板が見つらい席があるとの指摘を受けましたので、教卓の移動をすることで対応できるように検討中です。

2 庶務班

【A講義棟のエアコンについて】

A講義棟のエアコンは、各教室ごとに、スイッチのオン・オフ、温度調整が可能です。省エネルギー及び地球環境保護の観点から、室温は夏場28℃、冬場22℃を目安に各自で調整を行っていただき、適正な運用を行って下さい。なお、教室利用後のエアコン切り忘れ防止のため、スイッチをオンにした後、90分で自動的に切れるように設定しておりますので、必要な場合は再度スイッチをオンにして下さい。ただし、教室の利用後は、エアコン及び照明のスイッチを必ず切っていただきますようご協力をお願いいたします。

【A講義棟その他の事項について】

・A-101の照明が切れることについて

エアコンと違い、自動で切れる設定はありません。急に照明が切れるなど異常があった場合は、教員を通じて事務局総務グループ庶務班までご連絡下さい。

・時計設置について (A-103、201、305)

各教室への時計設置の必要性について、今後学生の皆さんのご意見も伺いながら検討していきたいと考えております。

・A講義棟教室のドアの音がうるさいことについて (A-107)

状況を確認し、必要な箇所は対応いたします。

・光の加減で少し字が見えにくいことについて (A-201)

日光の差し込み具合、教室の照明、着席場所等によって、見えにくかったのかも知れません。授業に支障をきたす等、引き続き多くのご意見があがった場合、状況を確認のうえ、

対応を検討いたします。

・ATM導入について

昨今、コンビニ等でATMの使用が可能となり、銀行が新たにATMを設置することが無くなってきています。（大型商業施設等、利用数が一定以上の場所のみ設置）大学の近くに郵便局、山口銀行、西中国信用金庫、セブンイレブンもあるため、そちらを利用するようにして下さい。

・通路、階段等の照明について

省エネルギー及び地球環境保護の観点から、講義棟内の通路、階段等は極力照明をオフにしています。日照時間の短い冬場などに授業等で遅くなった場合は、通路や階段の壁面に照明のスイッチがありますので、転倒防止のためにもぜひ利用して下さい。なお、スイッチは複数箇所にありますので、利用後は必ず切るようにして下さい。

【B講義棟のエアコンについて】

B講義棟のエアコンは、集中管理としております。教室内が暑すぎる、あるいは寒すぎる場合は、教員を通じて事務局総務グループ庶務班までご連絡いただければ対応いたします。

【B講義棟のその他の事項について】

・虫について（B-101）

時季や気候等により、虫が多くなり、講義棟の出入口や窓から入ってくるのかも知れません。強力な毒を持つ害虫等を発見した場合や、虫が大量発生している等異常を発見したときは、事務局総務グループ庶務班までご連絡下さい。

・ドアが閉りにくいことについて（B-101）

状況を確認し、必要な箇所は対応いたします。

・時計の設置について（B-203、206）

各教室への時計設置の必要性について、今後学生の皆さんのご意見も伺いながら検討していきたいと考えております。

・日光の差し込みについて（B-202、203、303）

授業に支障をきたす等引き続き多くのご意見があがった場合、状況を確認のうえ対応を検討いたします。

・本館～B講義棟間の屋根設置について

新校舎建築の際に検討をいたしました。簡易なものでは強風に耐えられないこと等の理由により、現時点で設置は不可能であると判断いたしております。

- ・換気扇の設置、換気について（B-206、B-303）
窓をあけて空気を入れ替えるなどで対応いただければと考えております。

- ・B講義棟のトイレの色について
将来、改修等を行う際にトイレの色についても改めて検討いたします。

【本館Ⅰ・Ⅱ棟のエアコンについて】

本館Ⅰ・Ⅱ棟のエアコンは、集中管理としております。教室内が暑すぎる、あるいは寒すぎる場合は、教員を通じて事務局総務グループ庶務班までご連絡いただければ対応いたします。

【本館Ⅰ・Ⅱ棟のその他の事項について】

- ・時計の設置について（Ⅰ-205、206）
各教室への時計設置の必要性について、今後学生の皆さんのご意見も伺いながら検討していきたいと考えております。

【体育館について】

- ・夏の暑さ、窓の開閉について
サブアリーナは北側ガラス壁面上部の窓が開閉でき、メインアリーナは南側ガラス扉が開閉できます。特にメインアリーナは、天井及び壁面下部の通気口から自然換気される構造となっておりますが、気象条件や体育館内の人数、その他の要因が重なり、暑くなることもあると考えます。対策として、業務用扇風機を複数台購入し、設置します。

- ・個別のロッカーの設置について
更衣室の広さや利用人数等の問題もあり、個別のロッカーの設置は難しいと判断いたしております。平成24年度、男子更衣室に12人用ロッカーを1台増設しており、次年度は同じ物を女子更衣室に1台増設する予定です。

- ・床がすべることについて
屋外用のシューズを使用した場合、すべる可能性がありますので、体育館専用シューズを着用のうえ、ご利用下さい。

- ・体育館がせまいことについて
体育館は、今年度武道場を増築しましたが、今後更なる増築は計画しておりません。

【その他】

- ・喫煙所について

喫煙所の場所については、ある程度分煙がされていると判断しておりますが、更なる分煙対策として、仕切りのための柵を設置し、喫煙スペースをより明確にしました。

3 経営企画班

【Officeのバージョンを変えないでほしいという要望について】

コンピュータ実習室のパソコン及びOffice等のソフトウェアは、劣化やセキュリティ対策のため、およそ5年毎に更新する必要があります。更新の時期には古いバージョンのソフトの販売が終了していたり、サポートが終了している場合がほとんどです。そのため、必ずどこかのタイミングでソフトの更新を行う必要がありますので、永続的に同じバージョンのソフトを使用し続けることはできません。

現在、コンピュータ実習室のOfficeのバージョンは2010で、次回の更新までの数年間はバージョンが変わることはありません。（ただし、A-302教室の後方に設置している一部のパソコンのみ、現在のバージョンはOffice2007で、今年の夏ごろにOffice2013にバージョンアップする予定です）

4 図書班

【図書館のWiFi導入について】

本年度、3階のPC利用室に無線LANを設置します。

【卒論貸出について】

もともと2週間の貸出期限を延長手続きなく1ヶ月間に増やし、更に貸出冊数の限度数を4冊追加して専有できるようにしたのが卒論貸出です。

1人の利用者が1ヶ月以上資料を専有してしまうと、他の利用者（同じテーマで論文を書いている4年生や、同じ資料を別の視点から活用したい利用者など）の利用を妨げる可能性があり、卒論貸出の際は必ず1度返却してもらうようにしています。また、長期休業期間中の特例もありますので、カウンターでご相談ください。

【返却時の付箋等について】

原則、貸出時と同様の状態で返却していただきますので、利用者が貼った付箋等は、返却の際に全てはがしてください。また、付箋をはがすのはもちろんですが、図書への書き込みやライン引き等は絶対にしないようお願いします。もし汚損してしまった場合につきましては、カウンターでご相談ください。

（4）総括と展望

1 全体的な改善傾向

個々の教員のレベルで地道な教育改善の努力がなされています。その結果、全体的な教育改善の成果が生まれており、それが数字となって表れています。

2 教育改善システムの確立

さまざまな問題はあるつつも、全体としてみると「授業アンケート→コメント→まとめ→翌学期の新しい取り組み→成果」というサイクルが確立し、そのなかからそれぞれの先生が問題を主体的に受け止め、改善の努力をしています。

3 個々の教員の努力と全体での問題共有の必要性

個々の教員のレベルでは、かなりの教育改善の努力がなされていますが、それが全体の問題として十分に共有されていません。学内の教育課題、内外の効果ある教育方法の事例が共有されるまでに至っていません。この点で、主要な責任を担うべきFD委員会が、その機能を十分に果たしていないことは反省すべき点です。討論会、学外研修報告会、報告ペーパー、ニュースなどを積極的に活用し、情報の共有と教育改善の啓発を図る課題が残されています。

教育改善の課題を、個々の教員の「自己責任」にしてしまわず、みんなの課題として共有していく姿勢が大事です。

4 急務の課題としての多様化する学生への対処

当面の具体的な課題としては、学力格差を中心にして多様化する学生にどのように対処するか、この問題を検討し、組織的な対応を図る必要があります。